

氏名	いま 井 尚 生
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	文博第98号
学位授与の日付	平成10年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科宗教学(キリスト教学)専攻
学位論文題目	前期P.ティリッヒの思想展開における歴史の問題

論文調査委員 (主査) 教授 水垣 渉 教授 長谷 正 當 助教授 芦 名 定 道

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の主題は、1920年代を中心とする前期のティリッヒの思想に内在する論理をトレルチとの連関において解明することである。この連関を論じる際には、体系構想と歴史思想という少なくとも二つの領域が考察されねばならないが、前者については他の研究者による先行研究がすでにある。本論文の新しい試みは、歴史思想における連関に焦点を当ててティリッヒの思想を解釈することである。

多岐にわたって展開されている前期ティリッヒの思想の本質的な特徴を取り出すために、体系構想と歴史思想とに通底する論理は何かをまず問わねばならない。論者はこの点にかかわる具体的な概念として、ティリッヒがトレルチから継承し独自に展開した「メタ論理」(Metalogik)とこの論理の内実をなす「成就」ないし「充実」(Erfüllung)とに着目し、これらを分析、解釈する。

第一章「トレルチにおける歴史の問題」では、トレルチの歴史思想が分析される。その基本的問題は、相対的である歴史のなかからいかにして普遍妥当的な規範が生み出されるのか、歴史相対主義の克服はいかにして可能か、ということである。またその根本的な論理的問題は、歴史における個と普遍の問題、かれのいうところのメタ論理に属する問題である。すなわち歴史哲学においては、歴史的個体を基本的範疇としながらも、歴史の意味解釈を可能にする普遍的な基準が見いだされねばならない。これについてトレルチは、個と普遍との結びつきは、現在における創造的な総合においてのみありうるという「現在の文化総合」の思想と動的真理思想とに答えを得ようとする。そしてトレルチは、この思想の形而上学的根拠をライプニッツのモノダ論に求める。かれの解釈によれば、モノダは個性性を保持しつつ他との同一性において普遍的なものに出会う可能性をもつものである。この可能性が現実性になるところに、歴史における決断の契機の重要性が認められる。

第二章「体系構想と歴史の問題」では、ティリッヒがトレルチの思想をどのように自らの問題設定の枠組みのなかで捉え直し、解決しようとしたかが分析される。トレルチが歴史哲学において問題としたメタ論理を、ティリッヒは精神科学の方法として規定する。すなわちティリッヒは、歴史の問題の核心を精神の問題として把握している。さらにティリッヒは、トレルチの動的真理思想を評価しつつ、真理を普遍的な意味での「真あるいは偽」の問題ではなく、個性的で創造的な意味充実の過程であると規定する。これは、真理の問いが哲学、精神史、体系化の三つの要素によって構成された精神科学の展開過程として捉えられることを意味する。哲学は緊張に満ちた意味の原理を提起し、これに基づいて、精神史が提起する問題にたいする適切で妥当な解決が規範的な体系として創造される。すなわち意味充実は、問題と解決、緊張と緩和の間の、動的で創造的な精神過程のなかに位置している。そしてティリッヒは、哲学における緊張に満ちた原理の措定に、メタ論理的方法に最も固有の性格が現れていると理解する。

第三章「トレルチとティリッヒにおけるメタ論理学」では、トレルチとティリッヒにおけるメタ論理の思想を光の粒子—波動概念をめぐる物理学史の解釈に適用することによって、この解釈を明確化することが試みられる。論者によれば、この試みの妥当性の根拠は両者の思想のなかにある。トレルチは、メタ論理を歴史の問題のみならず、自然の問題においても考

えられうるとしていた。ティリッヒについては、物理学史の解釈も精神の産物であると理解するならば、ティリッヒの議論を逸脱することなくメタ論理の思想を物理学史の解釈に適用しうる、と論者は主張する。トレルチが主張するメタ論理は、ある概念の内包に関する矛盾律の止揚にその成立の場が与えられるべきものであると解釈される。これにたいしてティリッヒのメタ論理の思想の射程には、緊張に満ちた原理に基づく体系化、すなわちこの矛盾が止揚可能となる概念体系の発見までが入れられている。

第四章「ティリッヒにおける歴史の問題」では、ティリッヒの歴史思想に内在する論理とその中心概念とを取り出すことが試みられる。第1節では、トレルチの「われわれの思惟の根本的歴史化」という認識を承けて、動的真理思想を真理概念の歴史化の方向で考えることにより、歴史相対主義にたいするティリッヒの議論が整理され、この議論のなかで「決断」という契機が重要な役割を果たしていることが指摘される。第2節では、ティリッヒがキリスト論を歴史の問題として規定するとき、「新しいもの」の現象の論理を担う概念として用いている「成就」の意味が解釈される。第3節では、生成の超越、すなわち「エスカトン」において、「決断」と「成就」が一つである、というティリッヒの考え方が分析される。

「結論」では、ティリッヒのいうメタ論理が「新しいものの現象の論理」にはかならないとの解釈が提出される。それは次の3点にまとめられる。

1. 旧連関のなかへと生起してくる本質的に新しいものの現象は、旧連関に動揺を引き起こす。それを旧連関において捉えようとするとき、それは緊張に満ちた象徴としてしか表現しえない。

2. 新しいものが把握される連関は、この新しいもの自身が原理となることによって創造される。その際、真理ということが主張される条件は、主体が旧連関の自律的な在り方から方向転換し、無制約的に普遍的なものへの志向をもつこと、そして「無制約的な意味を成就せよ」との要求のもとに立つこと、である。ただし、人間の文化として現実化する意味連関はあくまで制約的なものであるが、宗教的な救済の連関は超越性をも有することが留意されねばならない。

3. 旧連関は新しいものの現象において否定されるという面と、新連関において位置づけ直され、新しい意味を付与されるという肯定面をもつ。否定されつつ肯定されるという過程が意味充実ということである。成就とは、旧連関の内在的展開が実現することではない。むしろ旧連関は、この意味充実においてはじめて新しいものの突破のための準備であると解釈される。

以上のような結論から、トレルチとティリッヒとの関係が見通される。トレルチの思想には、新連関が完成を待っているものであるとの面が強く出ている。それゆえ、旧連関のうちにあるものは、新連関へ向けて決断し、前方の目標へと向かって絶えず形成していかなければならない。これにたいしてティリッヒの思想においては、すでに「成就」したという契機が強く現れている。新連関は現象の面と超越の面の両方をもつゆえに、決断と成就の両契機は一つに結びついている、と主張されている。このように論者は、トレルチとティリッヒの歴史思想における重要な概念を手掛かりとして、前者から後者への思想的展開を解明したのである。

論文審査の結果の要旨

パウル・ティリッヒ (Paul Tillich, 1886-1965) が20世紀のキリスト教思想において占める位置と意義は、かれの死後30年余を経ていよいよ大きく評価されつつある。ティリッヒ研究が今世界的な活況を呈しているのは、そのあらわれであろう。このことはまた、かれの思想の全貌がいまだ明らかになっていないことをも示している。

近年、とくに1920年代を中心とする初期ティリッヒの講義など、新資料の刊行が相次ぎ、後期の『組織神学』で展開されている思想を初期に溯って跡づけ、それをかれの思想形成の全体的な過程において捉えなおすことが可能になった。その際、現段階のティリッヒ研究において要請されている重要な課題の一つは、トレルチ (Troeltsch, 1865-1923) との連関でティリッヒの歴史思想を解明するという作業である。論者は本論文において、いまだ手がつけられていないこの課題に取り組んだ。

本論文の主要な成果は、以下の点に認められる。

1. ティリッヒの思想をトレルチとの連関で論じる場合、体系構想と歴史思想という二つの面を考慮する必要がある。体系構想については、すでに優れた研究が存在する。論者はいまだ本格的には取り上げられていない歴史思想の面に着目し、

しかもそれを二つの面に通底する論理との関係で解明しようとした。このような問題意識と問題設定とは論者独自のものであり、ティリッヒ研究に大きく寄与するものである。

2. 論者は、トレルチの『歴史主義とその諸問題』、ティリッヒの『学の体系』、『宗教哲学』といった難解な文献をよく読解し、それらの内容に即して説得的な議論を展開している。また、『マールブルク講義』をかなり詳細に扱っている点で、ティリッヒ研究の水準を一步引き上げた。

3. トレルチが歴史における個と普遍との関係を把握する歴史哲学的な論理として構想した「メタ論理」(Metalogik)にティリッヒが目撃して、これを歴史の個性的で創造的な意味充実の過程を把握するメタ論理的方法へと展開していったことを、論者はテキストに基づいて明らかにした。その際論者が、ティリッヒにおける「充実」あるいは「成就」(Erfüllung)の概念の重要性を指摘し、これが後期にも連なる初期ティリッヒの思想展開を解釈する上で鍵になることを示したのは、本論文のもっとも大きな寄与であろう。

4. ティリッヒにおけるメタ論理的方法が、歴史のみならず、思惟そのものの方法論として普遍性をもちうる可能性を、論者はかつて専門としていた物理学の事例を用いて説明した。これは他のティリッヒ研究に類を見ない、論者独特の視点である。

以上の点で優れたティリッヒ研究である本論文にも、いくつかの問題点あるいは欠点が見いだされる。全体として見れば、トレルチとティリッヒとの積極的な思想的連関は提示されているが、両者の差異に説き及ぶことが乏しいのが惜まれる。またトレルチとティリッヒの歴史思想に焦点を絞った結果、かれらが生きた19世紀末から1920年代の現実の歴史的状況とかれらの思想との内的連関が見過ごされている。両者ともに歴史的現実にたいして鋭敏な感覚をもって実践的にかかわった思想家であっただけに、思想理解として問題であろう。また、ティリッヒの歴史思想を理解するために必要な他の思想的諸連関の解明も不十分である。たとえば、ヘーゲルからマルクス、そして宗教的社会主義、さらに「運命」、「決断」の問題にかかわる後期シェリングからキルケゴールといった連関はまったく触れられていない。トレルチについては、『歴史主義とその諸問題』以外の文献が視野に入れられていないことは物足りない。二次的研究文献もさらに範囲を広げて参照すべきであった。引用の不正確、誤訳も散見する。

しかしこれらの難点は、論者が本論文で示した高い能力をもってすれば今後の研究の発展によって十分克服されうるものであり、本論文がティリッヒ研究として学界に独創的な貢献をなしたことを覆すものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として、十分価値のあるものと認められる。1998年2月26日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。